
モブキャラに恋しました。

八つ橋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モブキャラに恋しました。

【Nコード】

N3162X

【作者名】

八つ橋

【あらすじ】

いつの間にか転生させられていた主人公がモブキャラに恋をする。
ほのぼの系恋愛学園コメディー。

原作キャラもです

少し独自解釈があります。例えば聖祥学園が共学などですが複線に使っているものもあります

では、どうぞ

自己紹介しました。（前書き）

メイン差し置いて書きました。

面白いかわかりませんが楽しんで頂けたら嬉しいです。

メインは受験明けに更新したいなと思ってます

自己紹介しました。

こんにちは、俺は一応言っておきますけど転生者です

訳あって原作は介入してません

魔力はあります。S+といったとこだが、魔法の練習はしてない。
だって介入しないんだもん

デバイスもあるけど会話ようにしか使っていない。使うは変だな、
もう家族同然だ。名前は「ユーナ」女の声でインテリジェントデバイス。

形は指輪だけど、怪しまれないように学校に行くときはいつも家に置いて行っている。このデバイスのすごいところは無駄にハイスペックで人間の状態になれる。

人間の姿で戦う事が出来る魔力はA A+ぐらいだ。

ユーナはテンションが異様に高い高い、どこで知ったか知らないけど何故かあげぽよ朝だよって言って朝起こされた

正直可愛かった。いや寝ぼけていただけだ！ そのはず・・・

え、俺の名前誰か言ってないかって

「那緒」朝ごはんよ」

母さんが珍しく朝食を作ったようだ。いつも作るって言っているのに

「今行くよー」

俺の名前は君野きみの 那緒なお

私立聖祥学園中等部二年生

これからほのぼの、のんびり過ごします

自己紹介しました。（後書き）

どでしたかね・・・

よければ感想くださいまっています。

初恋しました。
(前書き)

第二話です

初恋しました。

春、桜散る季節

俺は一目惚れしました

その人は俺と同じクラスの隣の席、流れる黒い髪、透き通る黒い瞳。

一瞬で虜になりました

名前は「中川^{なかがわ} 榎奈^{かな}」さんというらしいです

学校の自己紹介から二週間が経ち、クラスメイト達が幾つかのグループに分かれ始める時期

榎奈さんも一つのグループに分かれていました

俺は友達とかどーでもいいからいつも席からは動かないけど

唐突だけど、このクラスには原作キャラのなのは・アリサ・すずかがいました

いつも休み時間に右斜め前に三人がいて正直邪魔でしようがない

楽しそうに話してる榎奈さんが見えねえんだよおお！！！！

何故、原作キャラに恋しなかったかというと

「なあ、なのは今日翠屋に行っていていいか？」

「良いよ、みんなで行こうよ」

「良いわね、今日空いてるし」

「私も平気だよ」

というわけ、わかった？

そうもう一人転生者いたんですよ。名前は白神しらかみ 大河たいがって言うらしい
興味は無いからうる覚えだけど

本当はメインキャラと恋したかったんですけど、あいつが少し早く絡
んでいったから俺は付け入る先がなくなったわけよ

でももうどうでもいいやって思ってる

聖祥ってレベル高いよね。転生前なんかブスばっかでうんざりだ
ったし

だから原作キャラはどうでもいいやってわけじゃないけど、恋愛対
象じゃなくなりました

「大河くん今日もお兄ちゃんとお稽古？」

「うーん、多分そうかもね」

まだ話してるよ

いい加減そこどけよ、榎奈さんが見えないから別に榎奈さんの事ストーリーカーしてるわけじゃないよ

悪行してんのは白神大河の方だユーナ曰く

白神大河は学校の裏サイトの管理人らしい

詳しくは知らないけど犯罪まがいなこと平気でやってサイトに載せてるらしい

ユーナが何故かハッキングが出来た時はびっくりした。俺マスターなのに知らなかったし

面白そうだという理由でユーナが既にハッキングしてたらしく「見つけたよ」と言つて液晶画面に盗撮画像見せられた時は驚いて鼻血出たのは黒歴史のページ目

とりあえず、さっきの腹いせにユーナにウイルス流してもらつたこれでパソコンや保存画像は使えなくした。下手にいじつたら家電製品をパーにしてとユーナに言つていた

それから犯罪防止という名のやつあたりを幾度もした

初恋しました。(後書き)

はい、どうでしたか？

これから続きます

初めて会話しました。(前書き)

三話です。

感想、誤字、脱字等ありましたらお願いします

初めて会話しました。

いつものように朝早く起きて学校で寝てる那緒です

最近、同じクラスの女子に名前と顔を交互に見られ最終的には那緒ちゃんって言われました

それと男子には男の娘って噂が流れてるらしい

てめーらしばいたろうかつつ！！

いらいらして寝れない時

ーガラッ

一瞬俺は肩を震わせ近くでバックを下す音が聞こえた
まさかと思って隣を見てみると榎奈さんがいました！

それに気付き榎奈さんが笑顔を見せました

やばっ、めっちゃかわいいよ。今日はなんて幸せな日
しかも、二人つきりだ。恥ずかしさと嬉しさで心が踊る

「おはよう？ それともおやすみ？」

うおー声かけてくれた。まぢ神だ！

「おはようかな？」

こんな勿体ないチャンス逃してたまるか
にやけを抑えながら必死であいさつする。始めが肝心って誰かが言

つてた気がする

「君野くんはいつもこんな早い時間に来るの？」

幸せの時間継続中

「うん、親が仕事で忙しいからせめて朝ぐらいはゆっくりさせてあげたくて朝ごはんとお弁当を作ってるからかな」

「へー、君野くんは親想いでお弁当も作ってるんだね」

榎奈さんがそう言って天使のような笑顔を見せた

もう死んでもいいかな？

「そんなことないよ。俺んところは母子家庭だから出来ることがあるばやってるだけだよ。弁当を作るのもその一つかな」

「ごめんね……。君野くんの家庭の事情知らなくて」

天使の顔から一変、今にも泣きそうな顔に変っていた

うわーやらかした俺

「へ、平気だよ別に。父さんは仕事で外国に行っちゃって今まで会った事が無いただだから、死んではないよ」

赤子を扱うように手をそわそわさせて、声が明らかに慌ててたりダサすぎる

でも、悲しそうにしてる榎奈さんも可愛い…ゲフンゲフン

「そうなんだ…。よかった〜私余計な勘違いしてたみたいだね」

「でも、すつごく嬉しかったよ。俺の事で心配してくれて」

さっきの空気はすぐに消えて俺は榎奈さんを見ながら、榎奈さんは俺を見ながら笑った

「「あははははっ」「」

本当に今日は良い日だ星座占いが微妙だったけど、転生して一番楽しかったかもしれない
そんな事を考えてたらあいつらが邪魔してきた

「おっはよ〜。あれ、二人しかいない」

「たく、当り前でしょ！ 大河が早く来すぎるのよ」

「そくだよ大河くんいつもより30分も早いよ」

「大河くん、アリサちゃん、すずかちゃん歩くの速いよ〜」

あいつら〜まぢ、うぜー空気読めよ！ なんだよいつもより30分

早いつて。榎奈さんがびっくりしてるじゃねか

「あれ？　もしかして邪魔だったかな？」

なんだよその顔、メツチャにやけてんじゃん。気持悪いんだよ
榎奈さんがその言葉に反応して顔赤くなってるよ

俺なんかと噂されたらいやに決まってる。そして、俺は白神大河を
睨みつける

「ごめんね、邪魔だったかな？　私たちはどっかで暇つぶししてる
ね」

おい、それは余計なお世話だよ。あーあ、榎奈さんがさっきよりも
耳まで赤くなってる。俺はなのはを白神大河よりも睨みつける
なのははびくつと肩を震わせ一歩後退する

小さく榎奈さんに

「こんな思いさせてごめん」

「えっ？」

ただ恥ずかしいだけかもしれないけど、俺としてのプライドが許さ
ない
バックを持って学校をサボった

教室を出る際に白神大河を睨みつけるのを忘れずに帰った

えっ？ その後どうしたって？

もちろん母さんとユーナに説教されましたよ。二時間くらい

初めて会話しました。(後書き)

三話でした。

魔王が奇襲しました。(前書き)

四話です。

連続投稿です

魔王が奇襲しました。

朝は見苦しいとこ見せてしまった那緒です

あの後なのはさんがね家まで押しかけてきたんだよ
来たときは奇襲！？　って思ってた勝てるわけ無いのに使ったこと
もないユーナを出すところだった

高町なのはめ！　いや、なねは侮れない

なねはが押しかけた理由は二つある

1つは今日の事を謝りに来た。別にそんなことでくんなよ、見たい
テレビが見れなかったことで怒ったわけではない。

二つ目は母さんに用があるらしい。知ってると思うけどなねはの母
さん、桃子さんと母さんの仲が良いらしい。小学校からの親友とか
それで翠屋のシュークリームを渡しに来た

あの超絶うまいシュークリームは翠屋だったのか！
今度行ってみようかなと思ったのは口に出さない

「あの夜遅くすみません水香^{みずか}さん、那緒くん」
水香^{みずか}ってのは母さんの名前ね
なんでさ、初めて話すのに名前で呼ぶ？

「あらあら、なのはちゃんわざわざごめんね。こんな遅い時間なの
に」

まあ、確かに中二で11時に男子の家訪ねてくるのはおかしいよな

「今日、その朝ごめんね那緒くん。彼女との会話邪魔して」

「バカ、違うよ俺と榎奈さんはそんな仲じゃないよ」

「あら、なーくんにもうそんな時期が来たのね」

ハア、出たよ母さんの悪い癖が…後で問い詰められるなこれ。てか、口軽くねなねはのやるー
わざとか？

「え、違うの？」

どうせ、榎奈さんとはそんな仲じゃないですよー

「なのはちゃん楽しんできるとこ悪いけどそろそろ帰った方がいいんじゃないの？」

「あつ、そうですね。では水香さんおやすみなさい。那緒くんまた明日ね」

「何言ってるの？ こんな遅い時間に女の子一人で帰させられないでしょ？」

なんかすつごく嫌な予感が

「なーくん連れて行きなさい。なーくんなんで部屋に帰ろうとするの？」

襟を掴まれて元いた場所に戻される。なんて力だ、あんな細い腕のどこにあるんだ？

「悪いですよ。水香さん家すぐそこじゃないですか」

「そんなこと気にしないのよなのはちゃん」

「俺行かないぞ」

「良いから行つて来てなーくん！」

いたつ、なねはの死角からみぞうちを突いてきやがった

「わ、わかった行つてくるってだからっ！」

その言葉で満足したのか行つてらっしゃいと言ってリビングに戻つて行つた

「ほら早く行くぞ高町」

「う、うん」

ああ、みぞいてゝなあ

魔王が奇襲しました。（後書き）

四話でした

感想でなのは達を避けるのはどうかという感想がありました。がまだ始まったばかりなので、そこはまだよくわかりませんね。分かり次第皆さん方話分かってくると思います。楽しみに待っていてください

それと、主人公の那緒ですが思ってることと言ってることは転生者ですが思春期なので大体は名前で呼ばないで苗字で言います

夜、家まで送りました。（前書き）

五話です。

感謝感激！！ 連載三日目で総合評価106pt
お気に入り38件

PV合計11・128アクセス
ユニーク合計2・240人

本当にありがとうございます。

これからもまだまだ「モブキャラに恋しました。」は続きます！！

では、どうぞ！

夜、家まで送りました。

こんばんはユーナに笑われた那緒です。

笑われた後なねは、もうめんどくさいからなのはでいいや
なのはを家まで送っています

今日は満月でいつもより周りが明るい

満月は良いね。丸い物は意外と好きだ。それと光でなのはの顔がは
つきりわかる

こうしてまじまじ見てみると普通に可愛いと思う

昔は恋人が欲しいことしか考えてなかったけど、友人って選択あ
ったよね

小学校の時だったからそこまで考えてなかった。今考えるとませて
るなあ俺

原作キャラのことを少し見直してるとなのはがこっちを向いて話
しかけた

「あのさ、那緒くんは中川さんとは付き合っていないんだよね？」

思い返すと朝二人で話してたのって勘違いされやすいのかも。それ
で怒った俺ってダサすぎるわあ

軽く流せば良い事だったのに、原作キャラって意識してたとしたら
白神大河に対しての嫉妬かな？ それとも妬みかな？ どっちか知
らないけど、それだけで避けていたんだと思う。いつか友達になっ
たとしたらみんなに謝らないとな

「那緒くん聞いてた？」

「あ、ごめんちょっと考えことしてたよ」

「それなら良いけど、二人は付き合っていないんだよね？」

「うん。仲良くなりたいとは思ってるよ」

これは本当だ。付き合うとしてもお互いの事は知っておきたい。だから、まず初めて見かけた時から友達になりたいと思ってた。それといつの間にか憧れから変わっていただけ…

「そうなんだ」

そういえばなんでなのは俺のことを名前で呼んでるんだろうか聞いてみよう

「高町なんで俺のこと名前で呼んでんだ？俺たちと話すのこれで初めてじゃないか」

「え、じゃあ、なんで那緒くんは私のこと“なのは”って言うてくれないの？」

ん、なんか噛み合ってたような。言ってたこと分からなかったんだけど…

「中二でいきなり名前って変じゃないか？」

「私たちは話すの初めてじゃないよ？」

あれ？ また噛み合っていない感じ？

なのははまだ話し終えていなかった

「私たちの親同士が仲良いのは知ってる？」

「まあ、今日知ったよ」

「あはは、それで一回だけ那緒くん連れて翠屋に来たことあるんだよ？」

そうだったのか。全然覚えてないな

なのはの話はまだ続く

「お母さんと水香^{みずか}さんは二人で話してたんだけど、私と那緒くんは
同い年ってのもあつて遊んだことがあるの。」

そして、友達の証として名前呼び合おうことになったんだよ。そこで私と那緒くんで大切な約束を結んだんだよ……」

最後のだけは声が小さくて聞き取れなかった。でも、すごく幸せそう
な顔だった

ドキッとしたのは思春期のせいにとく

用は、なのはと俺は初めて会ったわけじゃないってことが。でも、
小さい時だよな？

俺が転生者ってことを知ったのは小三で原作では無印始まる時で
その前のことを一切覚えてなし、

母さんにすごく心配掛けたのは転生して一番の悔いだ。

小三前に知り合ってたとしたらなのはに悪いことしたと思う。今か

らでも友達になれないだろうか

「高町、名前で呼び合うことは友達の証って言ったよな？」

「うん」

「今からでもなのはって言ってもいいのか？」

「うん！」

「これから友達になってもいいんだな？」

「うん！！ これからずっと私と那緒くんは友達だよ」

今日の出来事があって良かった。どこか頭の中でずっと考えてたことだと思っし、もしかしたら他の人も友達になってくれるだろうか

「ありがとうなのは！」

日付が変わり今日初めての満面の笑みをなのはに見せる

でも、今日初めて後悔することになった

「あ、中川さん？」

「高町さん、それと…君野くん？」

え、まさかの榎奈さん！？ なんでよりによってなのはのこと名前で呼んだ後に出くわすんだらうか？

まずいぞ、これは確実に二人は付き合ってるルートに思われてないか？

こんなことで初恋終わってしまうのか？

「えつと…「私は那緒くん到家まで送ってもらってるとこなの」っておい。なのは！」

まさかの勘違いされそうな発言ですか！？　これぞ白いなんたらの正体なのか

「そっなんだ…。私もう帰るね。また明日ね」

無情にも榎奈さんは走り去って、待つてと言っ前に闇に消え去ってしまった

「行っちゃたね中川さん」

「ああ…」

「じゃ、行こうか那緒くん」

終わったのかな初恋。もうなのはとの友達撤回しようかな？

それはなのが可哀想だ。まだ打開策があるはずだ、明日本当のこと言おう。決してなのは間違ってることは言って無いけど……五話目で失恋って洒落にならないでしょ。失恋したら俺廃人になれる自信があるよ

「ねえ、那緒くんは中川さんのこと好きなのかな？」

「え、別に。いきなりどうしたんだ？」

突然だったから友達についてしまったと思う。バレバレの嘘だったかな？　そこだけ気になる

「そうなんだ。中川さんが走り去った後、那緒くんがすごい慌ててたからそうなのかなって思っただけ」

そんなに慌ててたか？　でもすごいやばいとは思ってたからそれかな

「そうか。あまり気にしないで。」

じゃ、こっちも質問な。なのはには好きな人が気になる人いるのか？」

「ふえ？　那緒くん気になる？」

「うん。聞いてみたいな」

「いるよ。まだ好きではないけど、気になり始めた人がね」

高町なのはも女の子なんだね。中学二年で好きな人の一人や二人いてもおかしくないしね

多分、気になる人は白神大河だろう。あいつは見てくれはカッコいいし

友達のなのはが好きになろうとしてる人だ陰ながら応援してあげよう

そんなことで盛り上がってなのはの家を玄関まで見送って家に帰った

帰った後、母さんに色恋沙汰のことをこつてりと尋問されたのは言うまでもない

夜、家まで送りました。（後書き）

五話でした。

少し間違えました

那緒のお母さんみずかさんのことをすいかとルビしてしまいました。
直しておきます

誤解が解けました。(前書き)

六話です

誤字、脱字、感想等ありましたら感想までお願いします

今回はアリサが登場します

では、どうぞ

誤解が解けました。

あ、こんにちは絶賛鬱状態の那緒です

あれからどうなったって？　なのは奇襲事件&友達出来事の翌日に榎奈さんに本当のことを言おうと思ったけど席替えがあったとです

先生は「そろそろ仲が深まった事だし席替えするわよ」ってあんまりだ

まだ誤解が解けていないって言うのに！！

席替えした結果、俺は一番後ろの窓側で榎奈さんは廊下側の一番前です。誰か絶対仕組んでるだろうってくらい遠い席になった

ついでに隣はアリサだ。昨日のことで俺の隣になった時に鋭い睨みをしてきた。すごい怖かったと思う

言ってなかったけどはやとフェイトは違うクラスにいる。最近このクラスに来てはいないからミッドで仕事だろう。中学二年生なのに仕事って俺にとってめんどくさ過ぎて三日で辞める自信あるわ

昨日から打開策を探してるけど一向に見つからないんだよねー

考えがてら机に伏せてたら寝てしまった。先生に問題を当てられたらしい俺がね

隣にいるアリサは学級委員だから起こそうとして黙ってグーパーして起こされた。昨日の恨みでもあるの？

曖昧な思考回路であってるだろう適当なこと言ったら先生に褒められた

アリサは「なんで寝てたのにあってるのよ」と呟いていた

ラッキー

現在、昼食の時間いつも友達が少ない俺はアリサに睨まれながらご飯を食べるのは重苦しいので空を見ながら食べようとしたでも、外があまりにも気持ち良さそうだからたまには外にでも行つて気分転換しよう

体育館辺りまで来た。その辺で座るところがあるから食べようと思い袋から取り出そうとしたら何やら隣の壁越しで聞こえてくる

「くさん。前から好きでした。付き合ってください」

「えっと、気持ちは嬉しいけどごめんなさい」

告白したようだがうまくいかなかったようだ。振られた奴ご愁傷様男は教室に戻って行く。顔を見てみると確か三組の告り魔の高杉だったはず

そろそろ食べようと思ってたらさっき告白を受けた女子が教室に戻ろうとしていた

高杉同様、顔を見て見ると席替えして謝ることが出来なかった人が歩いていた

「中川さん？」

「君野くん？」

はい、そうです。俺の好きな人の中川榎奈さんなんです勝手に口から声が出てこの後のこと考えてなかった

「さっきの聞いてたの？」

「たまたまここでご飯を食べようとしたら聞こえただけだよ」

「こんなところまで？」

そうなんだよね。適当に歩いてたら教室から一番遠い体育館まで来てしまった

でも、体育館のその辺の木の下で寝るのが気に入りだから知らずに来たんだろう

「外が気持ちよさそうだったから。そうだ、中川さん一緒に食べる？」

「一緒に？」

……はっ！？ 俺はなんてこと言ってしまったんだ

「ごめん中川さん。口滑った」

「良いよ。ちょうどお弁当箱持ってたしね」

お弁当箱を少し上にあげてウィンクした。とってもキュートなんです！！

良かった。これで駄目だったら昨日のことで、ダブルパンチの完全
に鬱病患者の出来上がりだったよ

「ほら、中川さんここ座って食べよ」

「うん。君野さんの隣座るね」

「どうぞどうぞ」

「ありがとう。君野くんのお弁当美味しそうだね」

「そうかな？ 中川さんのお弁当箱可愛いし、とても美味しそうだよ」

「君野くん食べてみる？」

まだで？ 榎奈さんのお弁当を食べれる…だと！？
これは食べてみたい…
いただく前に先にあげるのが礼儀ってもんだよね

「中川さん、あーん」

「あーん！？ あーん」

少しテンパッてたけどあーんは駄目だったのか？ 食べてくれたけど……

「あーんかあ。次は私の番ね君野くんあーん」

うお、これは恥ずかしすぎる。さっき榎奈さんの気持ちはこうだったのかもしれないな
好きな人にあーんをしてもらえるなんて夢にも思わなかったよ

手を添えて少し頬ほほを赤く染めながらにこやかに卵焼きを差し出してる

すごく上品で可愛い

恥ずかしいけどいつまでも待たせるのは榎奈さんに悪い
ふー、心の準備をして・・・よしっ！

「あ、あーん」

おいしいなこの卵焼き。中は程よく半熟のまろやかで塩と砂糖のさじ加減が素晴らしい

「どうかな？ 君野くんよりかは下手だけど」

「そんなことないよ！ すごく美味しいよ」

俺と榎奈さんはお互いに見つめ合いながら

「「ぶっ、あはははははっ
「

前の朝みたいに笑い合う二人

これで解決したんだよね？

誤解が解けました。(後書き)

六話でした。

金髪女子に絡まりました。(前書き)

七話です

今回は八話を連続で投稿します

そっちの方が面白いと思うので

まあ、短いという理由もありますが・・・

では、どうぞ！

金髪女子に絡まりました。

おはよう、いつも通り聖祥学園に朝早く来ている那緒です
あれから榎奈さんと仲良くなって俺の席近く通ると必ず声かけてくれる

なんて良い子だ

爺臭いかな？ そんでもって話したこともないアリサさんから最近
声かけられました。なんでだろう？

ケース1

「君野起きなさい！ 次の問題あんたの番よ！」

「ZZZZZ・・・」

「ほら、起きなさい。数学の加藤先生に怒られるわよ」

「ZZ・・・」

―ボコッ

ケース2

「君野、あんたにプリント渡せって先生から」

「ああ・・・」

「聞いてんの？」

「ああ・・・」

「先生にプリント渡されたって言つのよ？」

「ZZ・・・」

—ボコッ

ケース3

「次あんた体育の授業でしょ？」

「そうだった？」

「もしかして、忘れてたの？」

「まあ、ああーどうしよう」

「どうすんのよ？」

「あのさ・・・貸して」

―ボコバキッ

…あれ？もしかして全部俺が悪い？

まあ良いや、次会った時にでも謝っておこう

あ、噂おすれば何とやらだ。アリサが慌てて机の中やカバンの中をあさってる

横目で見ながらどう謝ろうか考えていると、アリサがこっちを向いた

「ねえ、君野あんた今日の数学の教科書持ってる？」

慌ててた理由はこれだったのか。納得、とても言いにくそうに言ってる

どうしてこんな奴に頼み事しなきゃいけないのよみたいなことでも考えてるのだろう

「持ってるけど？」

「その…持ってくるの忘れちゃったのよ」

「貸せと？」

「そう言うことになるわねってなんで殴ろうとするのよ！」

「だって前に貸してって言ったら殴られたし」

「限度つてもんがあるでしょ！！」

ふむ、冗談はこのくらいにしないと逆に殴られるな。別に今日の数学は寝ようと思ってたし良いんだけど、落書きが書いてあるんだよね。魔王が砲撃ぶつ放す奴とか、ものすごい速さで斬りまくる奴とか、素手で岩をも砕く奴とか。どうしよう、傷つくな俺の体が

「嫌、なら良いんだけど…」

くっ、悲しそうにするなよ。これだから女は困るんだ
これは貸さないといけないじゃないか。後ろの方でなのはさんたちが見守ってるし

「わかったよ。だけど指定されたページしか開くなよ！」

「どうしてよ？」

「どうしても！！俺は寝てるからな」

「わかったわ、でも…あなたも勉強に参加しなさいっ！」

—ボコッ

金髪女子に絡まりました。(後書き)

七話でした。

まだ、続きます

ツンデレは本当にいました。(前書き)

八話です

七話は流れるように読めましたか？

では、どうぞ

ツンデレは本当にいました。

こんにちわ、現在お昼を食べ終わって五時間目の授業をアリサと受けている那緒です

え、なんでアリサと受けてるかって？ それはアリサが教科書忘れたからであって俺がを忘れたわけではない
そう、アリサが忘れたから

二回言ったのはいつも殴られてる恨みなんかでは決していない

「君野あんたまじめに授業聞いているの？」

「聞いているよー」

聞いている風に軽く流す。内容は全然聞いては無い

「絶対聞いてないでしょ。私と先生の話」

「そんなこと無いよ。アリサが言ったのは覚えてる」

「じゃ何なのよ？」

「私はツンデレじゃないって言ってただろ？」

「ひつとも合っていないわよ」

「あれゝそうだったけ？ 本心は合ってるだろ？」

「まあ、ってそんなことより授業を聞きなさい！」

「はいはい」

「はいは一回でしょ！」

「はい、オカン」

実際母さんのことオカンって言わないしね。それに礼儀は俺が母さんに教えてるし俺がいなかった時どうしてたんだろう。明らかに父さんにいったよな

「誰がオカンか！」

「立つな、叫ぶな、目立つだろ！」

周囲の生徒と数学の加藤先生が俺たちを注目する

うわー見ないで！ 榎奈さん、くすくすしないでー

安の序、アリサも周囲の状況を把握したのか顔を赤くし黙って着席する

「あんたのせいで目立ったじゃないのよ」

明らかにさっきよりも声が小さくなってる。ここで更にシンデレに茶化すのが俺流

決して面白そうだからという理由ではない

「ごめんな。でもいつも綺麗な金髪で目立ってるじゃん」

アリサに笑いかける

「き、綺麗…ってばーか！」

俺の教科書を奪い取って真っ赤だろっ顔を隠す
やっぱりツンデレだこの人

それからアリサは名前で俺のことを名前で呼ぶようになった

なぜに？

今日も無事に終わり帰ろうとしてたらアリサに捕まった

「那緒、あんた今日私と日直でしょ？」

「あれ、そうだった？」

今帰ろうとしてんだけど、朝からアリサ一人でやっていたのか。悪いことしてしまった

「ごめん、忘れてた。最後まで俺がやるよ」

「良いわよ。私がやつとくから次はちゃんとサボらずやるのよ」

む、やると言ったのにしょーがない

「二人でやるっ」

「いいわよ」

「なんで？」

「もう一人でやった方が早いから！」

「アリサ、俺は二人でやりたいんだ。朝からやってもらって悪いことしたと思って」

しつこいからつい呼び捨てで言ってしまった

「しょ、しょうがないわね。早く行くわよ」

ふー、これで大丈夫だ。よかった、明日先生に怒られずに済む

「待てってアリサ」

「早く来なさい那緒」

もうこの際アリサって言って良いよね？　アリサも気にしてなかったし

次にバニングスっていったら殴られそうだし

日直の仕事を終え帰ろうとしたらアリサに送ってもらった

車がめっちゃ長かった。あんな長い車初めて乗った。車内がすごい綺麗で良い匂いがした

アリサって面白いよね。もう友達二号だな

ツンデレは本当にいました。(後書き)

八話でした。

勉強会に誘われました。（前書き）

八話でやらかしました

最後の方を抜かしてしまいました…

書きましたので気になる方は読んでいただけると嬉しいです

では、どうぞ

勉強会に誘われました。

こんにちわ、もう五月で五月病にかかっていつの間にかテスト一週間前になってやばい那緒です
どうしましょ？ 転生前にも同じことがあったし五月に嫌われてるのだろうか

転生前の学校は進学校だったから私立よりは頭が良かったけどこの学校も進学校なんだよね
やれやれまいったまいった。良い点が取れないよ

テストは六月の初めだから得意科目を放置して苦手科目をやるうかそれとも反対に苦手科目捨てて得意科目を満点取るか。あ、得意科目はちゃんとやれば満点いけるよ。中二のテスト二回目だし

思考回路の渦にハマっていると隣から救いの手が差し伸べられた

「ねえ、那緒今日から一週間後にテストでしょ」

「うんそうだね。俺死ぬわ」

「そうだと思って休んでた分のノートと今日一緒になのはたちと勉強するんだけど来る？」

ノートを渡されながら聞いている
本当ですか！？ アリサ様っ！ いつもツンデレ乙とか思ってたすんませんしたっ

「ありがとう。ぜひ行かせてもらっつよ」

ノートを見ている。そしたらすごいんです。細かいことまで分かりやすくびっしりと書きとめられて綺麗というより可愛い字がより華やかさを増している

アリサオリジナルと思わしき問題と次の時のための予習が書いてある

「そう。なら帰り教室で待ってるのよ」

「分かったよオカン」

「だからオカンじゃないわよ」

そういえば誰か来るのか聞くの忘れたなあ
まあ、いいかどうせ帰りに分かることだし

学校も終わって教室で待っているとガラガラとドア開き何人か入って来た

誰かと思って椅子から立ち上がると後悔と嬉しさが混ざって気持ち悪いよ。まだ五月病なんだろうか？

「那緒おまたせ連れて来たわよ」

「ああ、でも多くね？」

メンバーは俺、アリサ、なのは、すずか、フェイト、はやて、白神大河、榎奈さん！！

こんなにいて良いのかな？ 俺抜けた方が良い気がする

「那緒くん今まで休んでたから一週間頑張ろうね」

「なのはちゃんたちもたまに休んでたよね？」

なんで榎奈さんがいるんだろう？ アニメではモブキャラなのに
関わることは無いはずなんだけど
全く周りに違和感がありません！！

「こんにちわ君野くん。私ねなのはちゃんに呼んでもらったの」

なのはちゃんだと！？ もしかして友達になったのか？

「友達になったの？」

「そうだよ那緒くん。私と榎奈ちゃんは今友達だよ、那緒くんが
休んでる間にね」

なんてこった！！ 俺が五月病にかかってなかったら進展していた
はずなのに五月病のバカやろー

今まで黙ってた白神大河が口を割って来た

「こいつが君野那緒か。しらねえな」

うざっ！ だが俺は大人だ。こんなことでキレるよなやわな人間で
はない

「初めましてかな？ 白神だっけ？ これからよろしくな」

ふっ、見てこれ完璧でしょ？ これが大人な対応だ

「なあ、アリサこいついなくても良かったんじゃないか？」

俺のことガン無視ですか

「そういうこと言っちゃ駄目だよ大河くん今まで学校休んでたんだからみんな協力してあげなきゃ」

「そうよ、もともと誘おうと思ってたし、学校休んでて言えなかったから今日言ったのよ」

白神大河うざすぎる。何回も言っでごめん。がしかぁーしまだ平気だ。俺は自称空よりも広い心の持ち主なのだからそれにアリサやずかもフォローしてくれてるし

白神大河は手に顎を乗せて考えてる仕草をする。少し間が空き口を開く

「やっぱりお前はいらねえよ」

ープツン、もう良いよね？ 結構頑張ったよ俺

「上等じゃねえか表に出やがれっ！！！！」

女子総出で俺を抑えるがキレた俺はそんなことでは止まらない一発あいつに殴らないと腹の納まり具合が悪い
だが、アリサによって喧嘩両成敗されて一発ずつ殴られた。ぬう、アリサめ俺は何もしてないのに

これから君野那緒と白神大河は絶対に仲良くなれないとこの場の
全員誰もが思っていた

勉強会に誘われました。（後書き）

九話でした

八話のことスミマセンでした。

告白しました。(前書き)

十話です。

この回は那緒がやらかす話

では、どうぞ

告白しました。

どうも、こんにちわ白神大河に喧嘩売られた後アリサたちに抑えられしぶしぶ殴るのを止めた那緒です

現在、アリサの車で翠屋に向ってる。近いのに…

運転手の人が迷惑だろおお！！　と思つてアリサに聞いてみたら運転手が睨んできた

なんでっ！？　俺悪くないよね？

「那緒くんは甘い物平気？」

甘いものか。確か翠屋のシュークリームは大好物だけどあまり食べないな。翠屋に通い続ければ甘党に入れるかもしれない

「翠屋のシュークリームは好きだよ」

この言葉に満足したのかなのはは笑顔でありがとうって言ってくれた。うん、可愛い

…あれ？　最近なのはのこと気になりすぎてない？

うん、大丈夫だ！　好きなのはなのはじゃなくて榎奈さんだ。なのはは友達であつて決して好きではない。そう好きなんかじゃない。大切なことなので二度言つてみた

「那緒、あんたいつも勉強道具を置いてきてるけど持つてきてるんでしょうね」

今度は前の席から振りむいてアリサが言つてきた

「当たり前じゃないか。何言っただよアリサ」

アリサに向って嘲笑うかのように笑って見せる

今の俺の立場を考えてみれば持つてこないと相当まずいことになる。
今日は金曜だし忘れたら土日の時、勉強が出来なくなってしまう

そう思っただ膝の上にあるスクールバックを開く

隣にいるのはが俺とアリサのやり取りを気になったのか榎奈さんと一緒に覗いて来た

榎奈さんはなのはの隣で俺となのはを挟んで座っている
ふむ、なのはめ羨ましすぎる

バックの中見わあゝ…持ち物は悪いけどなのはに持つてもらおう

・筆箱 ↑ これはいつも入れっぱだから特になし

・メモ帳 ↑ 晩御飯の材料が書いてある

・財布 ↑ 買い物時の必需品

・ガム ↑ 俺の口が欲しがってるんだよ

・PSP ↑ たまたま入ってたただけだよ？ 決して昼休みがひまだ
なあって思っただ使っただなんかないよ

「よくわかったわ那緒」

「あはは、那緒くんはバックの中も那緒くんなんだね」

「君野くんはこれでいいのかな？」

う、うるさい。それでも覚えてたんだぞ勉強に誘われた時までは…
それと榎奈さん、逆に辛いです。憐みの顔を見せないでくださいよ

「大丈夫！ 今すぐ学校に戻って取りに行くよ」

「あのー今日は職員会議で教室はもう使えないよ」

一番後ろに座ってるすずかが言ってきた

「あれそうだった。どうしようかな？」

「はあ、しょうがないわね。今日私の家で泊まりに来なさい。みっ
ちりしごいてあげるわ」

「良いな。俺も言ってもいいかアリサ？」

「そうね。どうせだったら皆で泊まりなしょ」

「ありがとなアリサオカン」

「だからオカンて言うな！」

アリサは良い奴だ。普段はツンツンしてるけど根はかなりの面倒見の良さだよ。良いオカンになれる

これから二日間アリサ家にお世話になり勉強会します

そういえば榎奈さんも泊るんだよね？ めっちゃラッキーじゃん。
アリサ様さまだ！

泊るとは言ったものの男女比違過ぎるでしょ。2対6だよ、俺と白神大河は犬猿の仲だし実質1対6かぁ。それと初めて話す人いるしはやてとフェイトね

そうだ。友達の家に泊るの初めてだ。

最初に泊る家が女子の家かぁ〜悲しすぎる

今、翠屋にいます。桃子さんすごい綺麗だった。土郎さんに「なのはとの関係は？」ってすごい形相で言われたから「白神くん以下です」って言ってやった。嘘じゃないしね

さっき桃子さんに母さんによろしくと言われました。そして桃子さんが去り際に店で使えるわねと言ったのは幻聴だろう

女子と白神大河は勉強しないでしゃべってる。俺も土郎さんの正面のカウンターでまだ俺には少し苦いコーヒーをすすっている。そろそろ五時か母さんに晩御飯作らないとな

「那緒くん。そわそわしてるけど、どうかしたのかい？」

「いえ、母さんのご飯作らないとなって思っただけです」

「そうかい。ここで作って行くと良いよ」

「良いんですか？ いえ、遠慮します。初対面の方の家で勝手に上がり込めませんよ」

あれ？ 土朗さんの顔が少し引きつったような

「む、そうか。でも気にしないで作っておくと良いよ。なのは、那緒くんにキッチンまで案内しなさい」

「はい。那緒くん行くよ」

「すみません土朗さん。キッチンお借りします」

そう言っただけで待っているのはどこまで行ってキッチンに向かった高町家の分も作るのが礼儀だよな

「ここだよ那緒くん。冷蔵庫の物勝手に使っても良いよ」

「ありがとうなのは」

「いえいえ、私はリビングでテレビを見てるから何かあったら言うてね」

「わかった」

何回か見たことある風景に俺がいるとちょっと不自然だなと思いつつ冷蔵庫に手をかける

今日はあまりコストはかからずなおかつ高町家に満足させれるようなものを作らねば

メニューは決まった。生姜焼き、味噌汁、ご飯、王道だね

それにしても人が良すぎるよな土郎さんも桃子さんも

桃子さんにはお土産にイチゴのショートケーキとシュークリームも買った

豚肉を炒めつつどんどん工程を進めていく

「那緒くんは一緒にしゃべってなかったけどなんで混ざらなかったの？」

「うーん。なんか入りにくい」

「なんで？」

「なのはやアリサは普通にしゃべれるけど他の人はしゃべりにくい」

白神大河とは仲良くしゃべってるなんて想像もできない。気持ち悪い

「そうなんだ。気にしなくて良いのに。それと榎奈ちゃんとは普通に喋れないの？」

「少しだけなら平気」

恥ずかしすぎてまともに顔も見えて話せない
あれ？　なのはに相談されてる？

次は味噌汁を作るためにあらかじめ切っておいたわかめ、豆腐を
お湯の中に入れる

高町家はうす味かな？　それとも濃い味かな？

俺んところは少し濃いかな

聞いてみたところ少し薄いそうだ

家で作るより味噌を少量を減らして鍋の中に入れる

うん、生姜焼きの香ばしい香りがし始めた

今だな、隠し味に塩水に漬けておいたリンゴをフライパンに入れる

「那緒くんは今日一緒にいる中で好きな人はいるの？」

「どうしたんだよいきなり」

「にやはは、そうだね。今やってるテレビが恋愛番組なんだよね」

なのはが言いながらキッチンに来た

「へーどういう奴？」

「良い匂いだあ。うんと、ねー単純な学園物で主人公が好きになった子が繰り広げるドラマかな」

「面白そうだね。それとさ、さっきの質問だけどいるよ」

友達には言ってもいいけどただで教えるのはなんか勿体ないからなのはの気になつてる人をつきとめてから教えよう

「榎奈ちゃんでしょ？」

……あれ？ 一発で当てられたような。気のせいだよな？

「さっ、作り終えたし家に持って帰らないとな」

「榎奈ちゃんなんだね？」

「さ、さあ？ どうか」

もうこれはなのはのワンサイドゲーム答えなければ命が無い。教えてもらってから教えるのに今ばれたら意味が無い。

なのはがどこことなく悲しそうだけど今の俺には関係無い。その内武力行使に出るだろうお話という名の精神破壊が

うん、そうだ！ 今の現状を整理しよう

- ・高町家のキッチンで二人きり
- ・ここでやらなきゃやられる（ばれるという意味）
- ・デバイスは持ってない。てか使えない
- ・相手はエースオブエースになるお方

整理した結果

絶対に勝てないよねこれええ！！

いや、くそが付くくらい弱い俺でも頭はどうにかなるんじゃないか？
仮にも人生は二回やってるんだ。なのはの倍は生きてるんだ経験では俺の方が高いはずだ
でもどうしたらなのはに榎奈さんのこと好きってばれずに済むか

ポク ポク ポク チンっ！

なのはは女の子だとても可愛い。って今は関係ないし。これを逆手に取ってばれずに済む方法は

「なのは好きだ!!」

なのはに近寄って両手をなのはの肩に置きなのはがドキドキする程度のとこまで顔を近づける

少しせこいと思うけどこれもばれずに済むためだ、なのはごめん

「ふえ？ ふええ〜!？」

「ごめん。一回家に帰るな！ みんなに言つといて」

料理をタッパに入れて持ち去る。なのははキッチンで尻もちをついていた。告白を受けられたもんな、無理も無い。俺も恥ずかしいよ

え、告白？ 初めてですけど

告白しました。(後書き)

十話でした

ここからは長くなります。付き合って頂けたら嬉しいです

後悔しました。（前書き）

十一話です

今回はユーナが出ます、そのことでの注意点。

ユーナは自分のことを漢字の名前で呼びますが那緒はユーナと呼びます

とりま読んでください

ではどうぞ

後悔しました。

初告白をした後、走りながらなのはにばれないためとはいえ告白してしまったことを思い出して恥ずかしくなった那緒です

次になのはに会うことを全くもって考えていなかった自分に後悔まぢありえんていただけでもしもだよ。もしなのはが俺のことす、好きだったらすぐくまzukない？

本当のこと言えないよね！？

「ぬわあああー！！」

いつもはこんな声は出さないがしょうがない。周りの奇異の目ばかりあえず、いらいらしてるから無視

一層、走るのスピードを上げていらいらを振り払おうとする

すっかり走るのが疲れとぼとぼ歩いていると家に着いた

母さんはこの時間帯ーだいたい今は三時くらいかなーは仕事をしてるからいない

机に置いてある紙で勉強会のことを書きとめておく

二階に上り自分の部屋に入る。いつものようにデバイス…ではなく、人間の姿でテレビを見ながら和んでいた。ユーナはユニゾンデバイスじゃないからユニゾン出来ないから初めて知った時はびっくりし過ぎて解体しかけた。別にデバイスマスターじゃないよ？ そんな

の幼稚だった頃の俺なんか出来るわけ無いじゃん。今もだけどね。話がずれたけどユーナはインテリジェントデバイスで何故か人間の姿になれるってこと！

機能は人間に例えると、テストしたとして今のアリサよりちょっと頭が良い程度かなノウ勉でね
そりゃそうだよねデバイスだし

容姿としては俺と同じくらいの身長で目は黒色で髪は茶色があった黒色で髪を下ろしている

どうにかして人間にしてやりたい。神でもいればなあ

俺は神はいないと思ってる。いないと転生は出来ないって言う人が多いけど神がいないと転生出来ないと言言できる人もいないと思う

それよりもユーナに勉強会のこと言わないとな

「おかえり〜那緒。いつもより遅いねえ〜彼女とデート？」

仮にもマスターの俺に呼び捨てだな。少しはレイジングハートやバルディッシュを見習えっ！！とは思わない。自分にとってはユーナはデバイスじゃないあの時からそう決めたんだ。ユーナは家に居る時、主に暇な時は人間の姿でうるちよろしたりしてる

いわゆる二トってやつだ。ユーナは違うっていうけど

母さんもユーナのことは知っている小五くらいから。このことはまた機会がある時に話すでしょう

母さんがユーナのことを知るってことはなるべく不自然の無いようにするために幼稚な脳味噌で精一杯考えた結果、ユーナを日本人の孤児にしようってなって名前を考えた「結菜^{ゆうな}」ってなった。カタカナを漢字に直したただけだけどユーナはすごく気に入ったようで決め

た時、抱きついてきたのは良い思い出

「ただいま。てか彼女いないし」

「リア充爆発しろー」

「しちゃえー」

ユーナは遊んで言ってるけど俺は割と本気！

「そうだ、今日から友達ん家で勉強会するから二日間いないから」

「えー二日間も那緒いないのー」

「そうだけど、その間母さんのことお願いな」

「やだー結菜も那緒と一緒に行くー」

「お前は子供か！ 今度埋め合わせするから」

いやいやユーナは了承してくれた。本当にデバイスかってくらい子供っぽいけど可愛いから許す

「ごめんな。それと埋め合わせの足しに翠屋のシュークリームとケーキ貰ったから母さんと一緒に食べるんだぞ」

「シュークリーム！？ やったー早くみーちゃん帰ってこないかな？」

テンションがハイだね。うん、すごくはしゃいで可愛い。ユーナは

シュークリームが大好きだ母さんの次にな。

え、俺？ 知らないよその次じゃないの？

「じゃ、俺行くから」

「行つてらー」

二日分の服を持って一階に下りていくと電話が鳴っていた

「もしもし、君野ですけど」

まあ、常識人の俺ですからこのぐらいたやすぎるくらいかな

「もしもし、那緒ね？ 今私ん家にみんないるけど家どこか知らないでしょ？」

常識人の俺としたことが名を名乗らない詐欺がいるとは知らなかった

「プー、現在おかけになったお電話は電波の届かない場所にあるか、存在しないかです。迷惑電話は困ります。こっちの立場を考えてください。お願いします」

「留守電に愚痴られた揚句お願いされた！？ ってか那緒いい加減にしないで！」

今あんたん家の前にいるんだから。それとおく何でも言うこと聞くのよね？」

「くそっ！ はかったなあああ、ありさー！！ 何が何でも逃げ切つてやる」

なんて策士なんだアリサ・バニングス口では勝てないと知って車まで用意して家を包囲するなんて

「あんた、本当は私ん家に来たくないんでしょ？」

「そんなこと無いよ？」

「本音は？」

「アリサの奴隷まがいなんてなりたくない」

「…わかったから早く来なさい。まだあんたすずかたちに自己紹介してないでしょ？」

おーそうだった。俺は知っててもあつちは知らなかったんだ
だから知らない三人は俺に話しかけなかったわけだな納得

「今から行くよ」

「早く来なs」那緒おーすごい大きな車が止まってるよ」いよ。
…那緒今のは誰ーガチャ」

さあー行くかゝさっきのはなかったなかった。少しなのは式のお話をユーナにしくなくちゃなゝ

楽しみだあゝ。この後アリサにどうされるんだろ…

「やーアリサおまたせって、うおーあぶねっ！ 出てきてそうそう殴ろうとするなよ！！」

「なにがおまたせよ！ 三十分もまたせてたじゃない！」

たくっ、器の小さい女だ。これだともてないぞー

「別にもてなくて良いわよ」

「読心術！？」

「思ってること声に出ただけよ！」

「あれ、車はどうしたんだ？」

「あんたが遅いから鮫島が夕食作りに行ったのよ」

「仮にもツンデレで残念な奴だけどお嬢様なのになあ？」

「なんでそこで私に振るのよ！ ツンデレで残念な奴じゃないわよ！
元はと言えばあんたの所為でしょうがああああ！」

「まあ、なんて子、そんな残念に育てた覚えはありません！」

「あんたに育てられた覚えもないんだけどねえ」

いじりすぎた。楽しかったけど、そろそろ行くかアリサも可哀想だし

「よし行くか！」

「ほんと自分がつて何だから！」

「またせた分、今度どっか行こうか？」

「そうね。そのぐらいしてもらわないと待ってた私が報われないしね。それと全部那緒の奢りだから」

なんですと！？ ユーナとアリサの分は中二の俺には重荷だぞ

「……わかった。行こう」

「なんで奢りで涙目になるのよ」

うう、買いたいマンガあったのに。こうなったら

「って、待っててあげたんだから先行くな〜」

「ふっ、はっはっはっは。今の俺に追いつけると思うなよ!」

俺のマンガ…来月絶対買ってやるからな!、待ってるよ!

「あんたが待ちなさい!」

走るのが疲れてアリサと一緒に歩いている。追いついた時ドロップキックをされたのは言うまでもない。アリサ女だろあんた…

「ねえ、那緒、あんたなのはに告ったでしょ？」

そんな、もうばれてるのか！？ 榎奈さんには伝わって無いだろうな

「なんのことだかさっぱりだ」

「尋常じゃない汗とこっち向いて話さないのはどこのどいつよ」

く、どうする君野那緒。完全に詰みだぞ

「……」

「黙ってるのね」

これはまたあの究極の技を使う時が来たか

「アリサ前から好きだ」

「あーそう。ありがとね」

「俺の告白がいとも簡単に流されただっ！？」

「やっぱり那緒だからそういうことだと思ったわよ。なのはのも本気じゃないんでしょ」

「はいそうです」

「なんでそんなことになったのよ」

「好きな人ばれそうだったから」

「そんなことで告ったの？」

「そんなことだとっ！？」

なんてやつだ。今まで友達だと思ってたのに

「そんなことよ。あんたは友達だけどなのはも同様に友達なのよ。あんたが素直に言っていればなのはは傷つきしなかったのよ。それとあんたもね」

うう、何も言い返せない。アリサは友達思いだな

「どうしよう、アリサあゝ」

「しょうがないわね。まず家に着いたらなのはに本当のこと言うのよ」

「ぐっ、わかった。ありがとなアリサ」

歩くのが重く感じる。最初から素直に言っていれば面倒なことにならなかったのに...

それとアリサに好きな人一発で当てられました

俺って分かりやすいのかな...

後悔しました。(後書き)

十一話でした。

その次は波乱の展開になるでしょう。お楽しみに!!

最近調子に乗ってる気がする…

だが気にしない! どんなに批判が来ようがなあ
実際、きてませんけどね。ありがたiii

誤字、脱字、感想等ありましたらお願いします

お泊り、一日終えました。（前書き）

12話です

ううゝ遅れてすみません。模試やらテストやらで更新できませんでした・・・

本当にすみませんでした

これからもこういうことが受験が終えるまで続くと思いますが分かってもらえるとうれしいです

では、どうぞ

お泊り、一日終えました。

「俺、二年二組の君野那緒。呼び方は何でもいいからよろしく」

知ってるとはいえはじめて話す人が何人かいる。少し声がこわばってしまっただが大丈夫だろうか

「私はフェイト・T・ハラオウン、隣のクラスの二年三組。よろしく那緒」

「フェイトちゃんと同じクラスの八神はやてやよろしくな。那緒くん」

「私は月村すずかだよ。同じクラスだよねっ」

ただいま自己紹介が終わりました。自己紹介はあんまり得意じゃない那緒です

そういえば白神大河が出て無いけど「お前なんかに話すこと無い」ってさっ！

チツ、こつちから願い下げだし。べ、別に話したいわけじゃないんだからねっ

……男がやると社会的にまずい気が。やってるアリサは尊敬するよ

そんなことよりも！ アリサン家について本当のこと言おうと思っ
てなのはを探したのに見つからなかったんだよね……

夕食の時見つけたと思ったたら露骨に隣に座ってる榎奈さんと話してこつち向かないんだよ。今は食後の休憩でそれぞれ話してるもしかして俺のこと嫌いだったのかな？

そんなこと無い！！

―チラ（なのはを見てみる）

―サツ（顔を背ける）

そんなことないよね？ あれ、なんでだろう目頭が熱くなっているような…

「どうした的那緒くん！？」

「いや、なんでもないよすずか」

「那緒くは好きな人いないんの？」

「はやてちゃんいきなりそれはやめようよ」

はやての発言にすずかは呆れたようだったが少しは気になって那緒の顔を見る

「まあ、その話はまた今度でそれより、あれ？ なのはたちいなくなってるけどどこ行っただか知ってる？」

はやてたちの方を向いているといいつの間にか二人の姿が消えていた

「なのはたちなら自分の部屋に戻るって行ってたよ」

フェイトは自己紹介の後なのはたちと話をしていたらしく場所を教えにくれた

「そっか那緒くんは二人のどっちかが又ツッフ」

「はやてちゃんその笑い方怖いよ」

「むう、那緒はなのはか榎奈が好きなんだ…」

さっきまでどこかに行って戻って来たらしくアリサが聞こえないぐらいの声で呟いていた

「俺も部屋に戻るのかな」

そう言って椅子から立ち上がり部屋から出ようとしたら、高貴な金髪さんくらいの高い声が俺の名前を呼んだ

「那緒っ！」

「ん？ 何アリサ？」

振り向くとアリサは顔を少し赤く染めて座ってる周りのすずかたちから子を見守るような目で見守っていた

「あ、あの〜どこ行くの？」

「部屋だっけ行ったじゃん」

「そう…私も行くっ！」

何この可愛い生物。えっ、今デレ期なの？ 何デレ？ どこにデレる要素あつたんだ？

うーん、でもなのは部屋行ってくて言ったらツンに戻りそうだし、しかし嘘はつけないよな

「別にいいけど、アリサが来たら気まずいかもよ？」

気まずいよね当事者じゃない人たちにとっては…本人はそれ以上に気まずいけどね

アリサも気まずいし、榎奈さんも気まずいし、なのはも気まずいし、俺も気まずいよな

みーんな気まずいっ！！

って現実逃避してる場合じゃなかった

「あ、あれね。やっぱいいわ。行っても良いわよ」

「おう、ありがとつなアリサ」

見えない見えない周りの人たちがごみ虫を見るような目で俺を見ていることを俺は見えて無い

そんな周りの視線に逃れるためにダッシュで部屋から出て行った

そういえばなのはと榎奈さんの部屋聞いてないや。ついでに俺が寝る場所どこ…

後先のことを考えず後悔しているとＴ字路の廊下の右側から綺麗な茶髪にどこぞの淫乱フェレットに似た柄のパジャマで俺の目的の人が歩いていて。あ、俺が歩いてるのはＴの下の方ね

「その茶髪のお姉ちゃん迷子になったんだけどどうしましょ？」

「あらゝ迷っちゃったんだねゝ」

今まではなしてなかったのに奥様風な口調で陽気に話す

「あはははは」

「にやはははは」

「あははは…」

「にやははは…」

―ダッ

告白された人といるのが気まずかったのかなのはまっすぐ彗星の如く走り去ろうとしている

「なっ、なんで逃げるんだよ!」

「いやああああ!　こっち来ないで〜」

「すごい言われようだなおいっ!」

もうこうなったらリアル鬼ごっこだ。なにがなんでも捕まえてやる

「いや〜来ないでー」

「待てこのやろー」

「もうこうなったら女子トイレへGO!」

「そっはさせるかー!!」

なのはよりも全速で走り女子トイレのドアをなのはが駆け込むより先に閉める

「ハア、ハア、ハア…なのは〜やっと捕まえた」

「ひいー」

俺の荒い声といつもより鋭い目で若干なのはが涙目になっている

「ふー、話を聞いてほしい」

「も、もしかして逃げたこと？」

「違う！ 告白のこと！！」

「にゃ、そっち！！？？」

一瞬にして顔が真っ赤になったなのは。ついなのは天然のボケに大きな声を上げてしまった恥ずかしい

「うん、とっても大切なんだ今後の俺たちにとって」

「ふえーわかったあ／＼」

さらになのはが耳までも赤くし顔を下に向け体がもじもじしている

「じゃ、誰もいない静かな場所で話そう」

「う、うん」

なのはが決意したような目で上目で見上げてくるのにドキッとした

風呂を入ったのに走り回ったせいか風通しのいい場所を選んで勝手にテラスを借りた
ちよつとさっきなのはに言ったこと思い返したんだけどあれって

告白に近いよねっ!?

気のせいだよね。なのはだってふつ

モジモジ、ニヤァ、ポンッ

うだし…平気平気!

ハア~~~~

テラスに着いたけど二人きりの話し合いってまずくない? すごい恥ずかしい?

けど話さなくちゃ! 全ては自分がまいた種なんだし

その前に外に出て十分ぐらい。そこは突っ込まないで十分かけて決心したんだから!

さすがに5月だからってまだ肌寒いしなのは薄いパジャマだしいつもパジャマ代わりにしてるパーカーをなのはの方にかぶせる

「え?」

「寒いだろ？」

「うん。ちょっとね」

俺のパーカーでぬくぬくするのは、それに対してパーカーを渡すのが精一杯のチキン野郎

「あの、さなのは」

「な、なにかな、那緒くん？」

——わざと顔が見えないようにフードをかぶるなのは——

「俺たちにとって大切な話あるって言ったじゃん」

「うん」

——つい下を向く。胸の鼓動だけが高まる——

「今まで待たせてごめん」

「うん」

——ごまかすことはいえ告白したことを思い出す——

「言う決意が出来た」

「うん…」

—— 顔が赤かったけど、どことなく嬉しそうにしてたなのはの
顔 ——

てしまったらもう… ——
—— 言っ

“友達”ではられないような気がする ——
—— 今までの様な

「だから言わせてほしい」

—— どんなに嫌われたって良い、軽蔑されたって良い、
俺が悪いのだから ——

「ごめんなのは！ あの告白は違うんだ！ 誤魔化すために言
ってしまったんだ」

本当はこれだけじゃない。怖かったんだ俺から友達たち、好きにな
った人が遠ざかって行くことを

「だから好きな人は…なのはじゃないんだ」

「・・・」

驚いて目が見開いている。すぐ落ち着いた顔に戻り顔を下に伏せ
てしまった

「で、でもなのははすつごく良い友達で親友って言っても良いg」
やだぁ！！」らいだぞ。え？」

今度は14歳とは思えないくらい子供っぽい口調で、でも真剣な
目で大人っぽい顔に変わった

「私は那緒くんのが好き！ 大好き！！ あの日からずっと…。
小2で初めて会った時から。那緒くんのがずっとずっと大好き
なの！！」

変わらず子供っぽい口調だけどどんだ俺のが好きかわかる
そして、今の言葉でなのはを送った夜の日のから引っかかったも
のがスツッと消えた

そう、まだ俺が転生する前のこと。なのはが言ったあの日は…
小さい俺、正確には俺であって俺じゃない人格は違っても体は同じ。
子供の俺が無意識のうちに体で反応して記憶を蘇らしたんだ。

そして、昔の俺に変わる

月の明かりが雲に遮り少し暗くなり

月明かりが那緒の顔を照らす

そこには満面の笑みを浮かべる那緒の姿

「なのはちゃんあそぼっ！」

「えっ！？」

お泊り、一日終えました。（後書き）

12話でした

久々にかけたので文法などめちゃくちゃですね。キャラ崩壊だし。
r z

少しミニアンケートなんですが、これ以上転生者は出さない方が良いでしょうか？

それとオリキャラなら平気と思う人

？出す出すっ！

？出さないほうが良い

ここからは下の問いで

？オリキャラ賛成！！

？オリキャラ止めとけお前じゃ技術不足だ！

？作者が勝手に決めろやどっちとも

メッセージか感想に「ミニアンっ！」で書いてください。
それと誤字、脱字、感想等ありましたらお願いします

今回遅くなつてすみませんでした。前書きにも書いたとおり作者は今受験シーズンですからあまり書けないというショッキングな時期です。誰しも通る道ですので温かく見守ってくださいね！

しいです

それと、「ミニアンっ！」の発表については集まり次第発表させていただきます

まあ、集まらなかったら自分で決めます。アンケートとかやってみたかったんです！ 作者と読者の交流だと思ってお願いします

長つたらしくすみませんでした。次回の話は一章で例えると最終場面！ 近じか那緒を転生した神が来るはず！

今適当に考えた一章「記憶となのはの物語」多分不採用

なのはがヒロインばいが最初だけ。すぐに可哀想な位置に行くはず

ではまた

記憶無くしました（前書き）

十三話です

アンケートは閉め切りました。後ほど発表します。

感想くださった方ご協力ありがとうございました

少し独自解釈があります

では、どうぞ

記憶無くしました

「なのはちゃんあそぼっ！」

「えっ!？」

どういうこと？ さっきまで下を向いていた那緒くんがふつと雰囲気はまだ声変わりしてないくらいの声から、急に小学校くらいの可愛い声に変わって今みたいなことを言った
正直、何が何だかまだ自分でもわかって無い。私が那緒くんに振られてしまった。

振られてしまったけど私は那緒くんのことが出会った時からずっと好きだった

那緒くんに出会った頃の私の家庭は家族みんなが忙しくて小さかった私は家族の中では何もできない邪魔な存在何だと思ってた。久しぶりにお母さんが休日が取れてお母さんの友達の水香さんみずかが家に訪ねに来た。

「桃子ちゃん来たわよ」

「水香ちゃん久しぶり」

この頃からお母さんと水香さんは仲良しで小学校二年生だった私にとって引っ込み思案な私にとっては友達がいることはうらやましいの言葉以外、何も見つからなかった

「あら、この子がなのはちゃん？　可愛いわね、大きくなったら絶対美人さんになるわね。」

「もう士朗さんがデレデレでね困っちゃうわよ。那緒くんも可愛いわ」

「もうなのはちゃん予約したいくらいだわ」

「あらあら、なのは水香ちゃんと那緒くんに挨拶しなさい」

「こ、こんにちわ。たかまちなのはです」

多分私のあいさつはとても小さくて誰も聞き取れなかったはず、お母さんも苦笑いだったし

「たかまちなのは？　良い名前だね！　僕はきみのなよろしくね。なのはちゃんっ」

でも、那緒くんは私の小さなあいさつを大きな声で返してくれた。私は大きな声に肩を震わせお母さんの後ろに隠れてしまった

「なのはどうしたの？　そんなに怖がらないで良いのよ。もうなのはと那緒くんは友達なんだから」

「ともだち？」

「そう、那緒くんもなのはのこと名前で呼んでくれたでしょ。名前です呼び合うのが友達なのよ」

「うん」

「だからなのはも那緒くんのこと友達になりたいと思うなら名前と呼んであげてね」

お母さんの言葉は私が初めて魔法と出会ってフェイトちゃんに同じことを言っただよなあ

そして私はビクビクしながらも那緒くんの目の前に立った

「なおちゃんその…」

この頃は那緒くんのことを声や服も女の子用の服を着ていて本気で女の子だと思っていた。もうさすがに中2で言えないし、言ったら那緒くんが何をするかわかったもんじゃないよ

「ともだちになって！」

「もうともだちでしょ。なのはちゃんあっちであそぼっ」

「うんっ。なおちゃん」

私はこの言葉がとてもうれしくてなおくんに手を握られながら家を出て行った

その時のうれしい気持ちはもう好きに変わっていて私の初めての恋がスタートした。私にとってのかけがえのない大切な人、大事な気持ちなんだ……

はじめまして高町なのはです

那緒くんの記憶が無くなったと知って急いでみんなに知らせた。みんなは心配していたけど特にアリサちゃんがすぐに病院に連絡なくちゃって慌て携帯電話のように耳にテレビのリモコンを当てても、すずかちゃんがもう遅いから迷惑だから明日にしようと必死に説得してくれた

フェイトちゃんと榎奈ちゃんがもう那緒くんがうとうとして眠たそうだからともうひと押ししてくれた。それに折れたアリサちゃんは明日午前中に病院行くわよと言っていた

その頃大河くんはお腹を抱えて地面に這^はいつくばって笑っていた。アリサちゃんがそれを見てお腹にキックした。そしたら大河くんが動かなくなってしまった。良い薬だと思い那緒くんの記憶が戻ったからお話をしようと思う

その後、別室に移りなんでこんなことになったか聞かれてお茶を濁すように言っただけでみんな私が那緒くんのことが好きなのを知っていた。みんなには水臭いと言われ正直申し訳なかった。大河くんは地面に倒れて置いてきて、榎奈ちゃんはもう少し那緒くんの場所に残っているとやってこの話は聞いていない

ちょうどこの話が終わった直後に榎奈ちゃんと眠そうな那緒くんが手を繋^{つな}いで入って来た。少し羨ましいと思ったのは秘密

那緒くんを寝かせるために部屋を用意しようと思ったからこの際、みんな寝ようということになった

そこで問題が起こった。那緒くんが急に目が覚めて私と寝たいと言
い出した。いくらなんでもそれははずかしいよ
もしかしたらなんかあっちゃったりしちゃうかもしれないし、私は
そんなことしないよ！ 絶対にね！！

そういうことにすごく敏感なアリサちゃんはすかさず反対。はやて
ちゃんは私にちよっかい
でも、那緒くんが素でアリサちゃんに涙目をお願いしたらOKして
くれた

って、私の気持ちは尊重しないのっ！？

結局那緒くんと一緒になることになってしまい私は胸の鼓動で寝れ
そつにありません

アリサちゃんの家って大きくて良いよね。すずかちゃん家も大きいし、フェイトちゃん家はマンションで憧れだし、はやてちゃん家はお屋敷だし、私ん家も道場があって小さくは無いと思うけどやっぱりアリサちゃん家は便利だなあって思ってしまった

なんですか？ それは私が恥ずかしすぎるからわがまま言っただけで大広間で寝ることになった。その時のアリサちゃんがすごい速さで対応してくれた

もちろん大河くんは一人で客間で寝てもらったことになったよ。フェイトちゃんとはやてちゃんがすごく残念そうな顔だったから、大河くんのところに行ってくれればと言ったら二人とも顔を真っ赤に行かないと言った

もう那緒くん（精神小2）は寝てしまっている

今日全く出来なかった勉強を急遽^{きんきゅう}することになった。けどもう私も含めてうたた寝そてるけど揺すったり、ほっぺをつねったりして勉強する始末

「アリサちゃんももう2時やから寝えーへんか？ もうみんな限界見たいやし」

「そうね。さすがに寝ましよう。明日もあることだしそれに那緒、のこともあるしね」

「みんなお疲れ様、今日誘ってくれてありがとね」

「いいのよ榎奈、今更もう友達でしょ」

「そうだねハハっ。これからもよろしくね」

かわいいなあ榎奈ちゃん。那緒くんが好きになるのわかるよみんな「いまさら」と笑いながら仲が深まるのが見えてくるもうそろそろ限界なのはみんな同じ。このままだと女子会になりそう

「もう寝ようよ女子会になっちゃうよ」

すずかちゃんも私と同じ気持ちだったように寝ることを勧める

「そろそろ電気消すわよ」

那緒くんは何かあった時のためにドアの目の前で少し間が空いて私の布団で寝ることになった

『おやすみ』

明日も楽しいことがあるといいな。何よりも那緒くんが早く治りま
すように

記憶無くしました（後書き）

ミニアンっ！ 発表会パチパチパチっ

？ 0 人

？ 3 人

？ 3 人

？ 0 人

全体的に少なかったけどめげないよ。これからもやると思うんで次回に参加お願いします！

それと桃子さんや一人称とかキャラ崩壊何ですよね。うん、わからんな

勉強しませんでした。前編（前書き）

14話です

今回はシリアス多め。大河の好きな人が明らかに！ それとすつこい鈍い人じゃなければアリサの好きな人も分かるかも。まあ知っている人もいますけど

初めての前後編。ただぐだぐだになりすぎたから区切っただけなんだけどね

なのはと大河には何気な共通点が明らかに
ネタばれが多くなりそうなのでこのへんで

では、どうぞ

勉強しませんでした。前編

大分過ぎやすくなった季節

いつもより遅く寝たせいから少し起きるのが遅くなってしまった精神的にみんなより疲れてしまいこんな目に逢ってしまった。アリサちゃんたち誰でも良いから起こしてくれれば良かったのに・・・

どうして那緒くんが私の布団の中にいるのっー!!

那緒くんからの告白の時よりも整った寝顔がすぐ目の前にある

こ、これは…可愛すぎる

ん？ でもこれって第三者が見たら誰でも私が那緒くんと寝てたってことになるよね!?

那緒くんの外見から見てみれば学生的にまずい状況で、中身から見てもみればシヨタコン？

こうしちゃいられない早く起きてみんなの所行かなければ！ みんなに見つかったら大騒ぎになるに違いない

那緒くんを起こさないように毛布を剥ぎ取って起き上がろうとする。この時急ぎすぎたのがあだになった

ーガバッ

すると那緒くんは起きようとする私のパジャマの袖を掴み布団に引きずり込む

私は引つ張られ那緒くんを潰してしまつのを防ぐため地面を両手で抑える

さっきの状態は添い寝程度で今度のは押し倒したような感じになつてしまった

「ムニヤムニヤ…なのはちゃんもう、無理だよ」

那緒くんの顔が急にだらけた顔になつて涎よだれを垂らしてる

キヤー、本当にまずいよ。まだ誰もいないのがせめてもの救いだよ
てか、那緒くんどんな夢見てるのー

「…なのは、ついにあんた……」

戸の音は聞こえなかったからここにはいないで私と那緒くんだけだと思つてたからまさか

「あ、アリサちゃんいつから…」

まさかアリサちゃんがいるなんて思つてもみなかたつたよー！！

「ついさっきよ。ごめんなのはさすがに無いわよ」

すごい軽蔑な目で私を見てる。案外アリサちゃんは思い込みが私たちよりも激しいから今の状況を私が悪く思つてる方に勘違いしてるに違いない

「なのはもう、友達ではいられないようね…」

私が待つてと言おうとしたらアリサちゃんの顔から泣き真似？

あれ、ほっぺに伝う一筋の光が…相当シヨックだったらしい。早く誤解を解こうと言葉を噛みながら発する

「ち、違つよアリサちゃん！ こ、これは、その…」

「もういいわ、那緒だつて「もうなのはちゃん…だめ」っていつてたから」

「いや〜！ 最初にムニヤムニヤ言つてたからね！ あれは寝言で何もなかったの！！」

「でも！ なのはは那緒のこと…その押し倒してるじゃない。今からなのはが那緒を襲おうつてことでしょ！」

「ちつがあ〜う！！ それも何故か起きたら那緒くんが隣で寝てて起きようとしたら那緒くんが引つ張つてこういう状況になつちやつただけだよ」

「なのはわかつたわ。今まで疑つてごめんなさいね」

「アリサちゃん…うん。分かってくれたなら平気だよ」

話せば何でも解決つて訳じゃないけど、このぐらい親友ならすぐに解決できるに決まつてる

そつだよアリサちゃんとは小2の時から友達なんだもん。こんな些細な事ささいで親友の絆に溝が出来るわけがない！

今日は窓を見たけど良い天気だしみんなで出かけられたら良いな。と思い那緒くんを起こさないようにアリサちゃんの側まで行く

「でもね、なのは…」

アリサちゃんは呆れたような顔で続ける

「それは自分の布団で言うときだけに弁解を許されるのよ」

アリサちゃんは優しい顔に代わり口は笑ってるけど全く目が笑っていない

私はギギとホラー映画みたいな感じで後ろを振り向く
乱れた布団、きれいに置かれたレイジングハート。と言うことは言わなくてもわかるね。あえて言わないよ、挫けそうだから

「どうして〜!!」

今日一番大きな声がアリサちゃんの家で聞こえたと後でフェイトちゃんに教えてもらった

おはようございます。さっき絶叫したなのはです。今日もそういう騒がしい日になりそうです

このままアリサちゃんの中では記憶のない好きな人の寝込みを襲う変態さんになってしまったのだろうか…

後で聞いてみよう

私はアリサちゃんとみんながいるリビングに移動して今はやてちゃんと合流した

「なっはっはっは、なのはちゃんも難儀なこったな〜」

「もう、本当だよ！ 私そんなに寝相悪くないのに那緒くんの布団の中で寝てたんだもん。アリサちゃんが勘違いするのが悪いの！」

「なんでなのはが逆ギレすんのよ！」

はやてちゃんは苦笑いしてアリサちゃんはまだブンブンしてる
するとすずかちゃんがこっちにきた

「朝ご飯出来たみたいだよ」

朝から大きな声を出してしまったから、お腹が空いちやったみんな
で食べるため食堂と言っても良いような大きな机のある部屋に向かう
向かうと言ってもすぐ隣なんだけどね。そう言えば那緒くんを起こ
さなきゃ

「おはよう……」

行こうと思ったらドアをゆっくり開け空いている手で目を擦りなが
ら眠そうな顔で起きてきた
この場にいるみんなで笑顔でおはようって返す

「あら、那緒くんを自分で起きたんか偉いな」

「うん、はやておねえちゃんの笑い声で目が覚めたんだ」

那緒くんの周りからパア〜と明るくなった顔で笑った

「なのはちゃん！ 那緒くんかわええなあ」

こつちを振り向き子犬を見たような小さい者を愛^めでるような声で言った

そしてまた那緒くんの方を向き優しく那緒くんの頭をナデナデし始める。む、はよてちゃんずるい！ アリサちゃんもそういったような顔ではよてちゃんと那緒くんをみてる

「おはよう那緒くん」

「おはよう！　なのはちゃん」

少し遅れて私も那緒くんにあいさつする

「むう、なんでなのはだけちゃん付けなのよ…」

アリサちゃんが聞こえないぐらいの声で言ったから気になったけど、とりあえず那緒くんとの話の再会する

「今日はよく寝れたかな？」

「うん！　なんか隣が暖かくて気持ちよかったよ」

「うっ、そうだったんだね」

「もうね、お腹空いちゃったな」

「そろそろ行こうか那緒くん」

「そうね、みんな待たせてるし」

みんなが待っていた。謝ったらみんな許してもらった

今日のご飯はトースト、目玉焼きに牛乳と言った普通の朝食だけど私みたいな庶民がそう手が出せるようなお金ではない

「いただきますっ」

「良くできました。それじゃいただきますよ」

「アリサちゃんって那緒さんに優しいよね」

「そ、そんなことないわよ！」

すずかちゃんの言葉でガタンと音を立てて否定する。そのアリサちゃんの顔はほんのり赤みを帯びている

「アリサちゃん、子供苦手そうなんだけどな」

「私は那緒だから平気なの」

「ん？　なんか言ったアリサちゃん？」

「何でもない！」

私はアリサちゃんたちのやりとりを見るのは止め次は那緒くんを気に入ったはやてちゃんたちのやりとりを見してみる

「おいしいねはやておねえちゃん、榎奈おねえちゃん」

「そうやね〜。みんなで食べるから尚更なおさらやな」

「そうだね。私こんなに大勢で食べるの初めてだよ」

こっちはこっちで盛り上がってるみたい。話に乗り遅れてしまったから必然的に一人で寂しく食べてる

話そうとすれば出来るけどご飯が…おいしすぎる。太っちゃうよーやだなと思いつながらも勝手にトーストを口に運んでしまう

するといつもはクールとかいろいろな顔を持つ持ち主で学校の同じクラスの女の子がかっこいいと言う大河くんが那緒くんとはまた違った整った顔と声変わりがし終わった声が私の耳に入ってきた

「なのはは君野那緒のことが好きなのか？」

「えっ！？ どうしたの急に」

いきなりで驚いた。普通に当てられた…もしかしてバレバレなのかな？ これでも、意識し始めてずっと隠してきたのに

大河くんはいつもこんなことを聞いてきたことなんて一度もなかった私たちみんなにやさしくて、何故か那緒くんには厳しいけど…今はさすがに気を使ってるらしいけど、那緒くんに話を振られるときこちない態度そそくさ話し終え去ってしまう

大河くんの優しさや照れるのや私たちの深いことまで詮索せんさくしないのがまたフェイトちゃんやはやてちゃんが好きになったところだと思う。けどどこか私たちとは一歩後に付いてくるように感じる

「いや、別にただ少し気になったただだから。気に障ったんだったらごめん」

「ううん。少し驚いただけだったから平気だよ。それと好きだよ那緒くんのこと」

素直に教えたのは友達というのと、気にかけてくれて嬉しかったからなんだけどね

「そうか、教えてくれてありがとうなのは」

「いえいえ、こちらこそ気にかけてくれてありがとうね。あ、それと大丈夫お腹？」

「腹がどうしたんだ？」

「もう、好きな人に蹴られた場所だよ。お話ししようと思ったけど、よくあるよね好きな子にかまってほしいときなわざとちょっかい出すのとか」

私はニヤニヤしながらいつもとは逆に攻めに入ることが出来た、ちょっと嬉しいかな

「なっ！？　いつからそのことを知ったんだよ！」

荒い声でダンと机を叩いた。みんなこっちの視線を感じる特にフェイトちゃんとはやてちゃんの視線が痛い…

「まあ、それはそのうち話すとしてどう？　順調かな」

「なんというか、俺を向いてくれないかな。あいつの方ばかり向いて」

みんなは何にもなかったよう無かったようにそれぞれ話を戻す大河くんははやてちゃんと榎奈ちゃんと話してる子の方を見る。そ

してその子をちらちら見るアリサちゃんも見る

枯れた声で笑ったが今にも心が折れてしまいそう

辛く、何にも出来ない自分にイラつき、その気持ちに気付いてくれない好きな人に歯痒い^{はがゆ}気持ちなんだと後から付け足した

私も解る。初めて那緒くんと同じクラスになってすごく嬉しかったけど、私のこと忘れたのだと思いシヨックで諦めようとした時また那緒くんと話すことが出来てまた友達になれて同じクラスになったときよりも嬉しかった

でも、前みたいには呼んでくれなくて離れてしまった感じがした

そして、榎奈ちゃんを好きになっていて、アリサちゃんとも仲が良はどうしようもないなって思うしかなかった

「なのはおも大体俺と同じなんだな」

「にやはは、そうだね。しかも卒業したら会えなくなっちゃうしね」

「あゝ、そうだね。仕事だからしょうがないよな」

私たちは溜め息を吐いて現実を見せられたことに落胆

話が終わった後に那緒くんたちを見たら何かを企んでるような顔をしていた

勉強しませんでした。 前編（後書き）

感想などありましたら気軽に書いてもらえるとうれしいです

はやての関西弁が出来てるか分かりませんよ…

次回は少し大河がハツチャけます

勉強しませんでした。後編（前書き）

十五話です

すみません。前後にしまつてので早く投稿しようと思つてたの
に出来なくて

もうそろそろクリスマスですよー

その日は塾休みなんでイベントやろうかななんて思ってます。リア
充な人は読めないかもしれませんがね

イベントやろうかな。今は考え中なんですけど、今考えてるのは
二日間で三回連続投稿！！ってな感じです

皆様なんかいい案ありましたら感想の一言に書いて頂けたら嬉しい
なってます

では、どうぞ

勉強しませんでした。後編

『えー』

私と大河くん以外の驚きの声が部屋に響いた。私たちは声の発信源まで行ってみるとはやてちゃんと那緒くんが楽しそうに笑ってた。榎奈ちゃんはその緒くんの隣で苦笑

「はやてもう一回言って」

「せやから、かくれんぼやりたいつて言ってるやろ」

アリサちゃんの質問にはやてちゃんは人の話聞いているのかみたいな顔で返した

「勉強はどうすんのよ」

「アリサちゃんは堅いな。今はそんなことやってる場合ちゃうやろ」

はやてちゃんの目線が那緒くんの方に向く。自然とみんなの視線が那緒くんの方に向く。那緒くんは？が頭の上に乗っかって首を傾げてる

「わかったやろ」

「でも……」

最初の強気の声から一転、気持ちはわかったけどテスト前に遊ぶというのはどうだろうと思ひ反対したいのだろう

私は普通にテスト期間中も遊んでて前日にアリサちゃんたちにすがりついてるな。情けないよ

「アリサおねえちゃんはかくれんぼしないの？」

「うう、わかったわよ！」

那緒くんの上目涙目の武器を使いアリサちゃんノックアウト

大河くんは好きな人を知ってるから明らかにいやそうな顔をしていたうん、嫉妬だね。わかるよ私も那緒くんにあれをされてみたいのからね

「やったな。これで遊べるね那緒くん」

「良かったね那緒くん」

「うん！　かくれんぼだー」

3人で交互にハイタッチをする

私、アリサちゃん、大河くんは釈然としない思いで三人を見守ってた

フィールドはアリサ家全体を使いたいとのことだったが、アリサちゃんやすずかちゃんがかくれんぼにそれは広すぎること、榎奈ちゃんによる提案で那緒くんが迷子になるから室内でやろうとなった

「じゃ、ルール説明な」

私と那緒くんがテレビを見ていた所ではやてちゃんたちによるルール説明が決まったようだ

ルールを決めてたのはこの家の主のアリサちゃんに一番人のことを考えてると思うすずかちゃんだ。

ルールの内容は

- ・家から出ては行けない（庭も不可）
- ・初めに見つかった人が次の鬼となる
- ・開始から1時間以内で残り一人でも見つからない場合鬼の負け、三回連続で鬼だった時最初に見つかった人が鬼となる
- ・危険と思うところには行かない
- ・何かあった場合、解決次第で再開する
- ・那緒は誰かしら付き添いが必要だそうだ。まだいくつか細かいルールはあったけど特に出すような物はないかな

「誰か質問ある人はいるかしら」

アリサちゃんが最後の確認をする

「はい、アリサ。那緒の付き添いだけど、どうやって決めるの？」

「最初は鬼決めジャンケンで鬼の前の人が付き添い。二回目以降は最初に見つけた人が那緒の付き添い」

アリスちゃんはこれで良い？　と言って質問をしたフェイトちゃんに聞く

「うん、ありがとう」

「じゃ、そろそろやるっか」

すずかちゃんの合図でみんながジャンケンの構えをする

『ジャンケン、ポン』

ジャンケンの結果、私とはやてちゃん、フェイトちゃん、すずかちゃん、榎奈ちゃん、那緒くんが一発でグーで勝ちアリスちゃんと大河くんだけとなった

「くっ、何故チヨキを出してしまったんだ。次は負けなければ」

「どうして負けようとするのよ！」

「良いからやるぞ、ジャンケンポイ」

「わ、わっ」

アリスちゃんが慌てて早く言った大河くんに合わせてジャンケンをする。大河くんはすごく楽しそうな顔をしている

パー ↑アリサちゃん

チヨキと見せかけてグー ↑大河くん

「あんた後出ししたでしょ」

「してないよ。それより負けた俺が鬼な」

バレバレな後出しでしらを切る大河くんだがアリサちゃんは見逃さなかった

「大河おにいちちゃん後出しした」

純粹無垢な那緒くんはこういうことをアリサちゃんと同じ様に言いはやてちゃん曰わく那緒くんがルールらしい
「くっ、那緒め」

「いいからやるわよ、ジャンケンポイ」

グー ↑アリサちゃん

チヨキ ↑大河くん

「よっしゃやややや！」

ガッツポーズをしながらあまり出さない大声で周りを引かせる

「ははは、よかったね大河くん」

「いつもの大河はどこに」

「大河おにいちちゃんは鬼好きなんだね」

「那緒くんはこのままでいたね」

「うんっ」

今私はアリサちゃんの部屋らしき場所に来ている。猫のぬいぐるみからライオンのぬいぐるみまでいっぱいベッドや机の上に規則的に並べてある

そして、クローゼットに隠れさせてもらうことにした。入ったときアリサちゃんの良い匂いがしたのはしょうがないと思う

- ガチャ

「アリサおねえちゃんここに隠れようよ」

「私の部屋ね、いいわよ」

クローゼットの隙間からのぞいてみると、アリサちゃんは那緒くんとちゃっかり手なんか握っていた
後でみんなにいつてあげよう

「ここにしよう」

「ベッドのところね」

アリサちゃんは誰かに報告してるのだろうか…

そういえば、アリサちゃんは一人っ子で子供の相手苦手そうに見えるのに扱いがうまい

これも那緒くんの顔と性格が可愛いからなのかな。ああそうか、ぬいぐるみもそうだけど可愛い物には目がないんだ

前の那緒くんには少しトゲトゲした態度で接してるけど今の那緒くんには私たち以上に優しく接してあげてる

前にアリサちゃんの携帯を見てみたら可愛いストラップだったからつい写メってしまった

そんなことを考えていたら誰かが入ってきた

「あつ、榎奈おねえちゃんだ」

「那緒くん。アリサちゃんもいるね。ここ良いかな」

「もちろん良いわよ」

那緒くんたちが見えないけどなんとか声で聞き取ることが出来る
とっても楽しそうだな

「ふにゃ」

「誰の声？」

「…ごめん私」

「可愛い声だね。どうしたの？」

「わからない。急に何かが私を…」

かわいー可愛ーいよアリサちゃん、私キュン死するところだったよ。
やった人ありがとね

「ひやや、何？」

なにに？ 次は榎奈ちゃんや、バイ。キュン死しちゃうよ。と
言うことは那緒くんがやったんだね

『キヤ』

可愛ーいよー

『あん』

あれ？

『ううん』

まさかね

『だめ』

「何やってんの三人とも!!」

まさかと思って見てみるとアリサちゃんと榎奈ちゃんが那緒くん
指でツンツン突っついていた

- バンッ

「見つけた…って、何この力オス」

「何って言われてもね…」

「あゝあ、見つかった」

那緒くんは残念そうに走り去ってしまった

あれから何回もやってみんな疲れたらしいから早く寝てしまった

勉強しませんでした。 後編（後書き）

一番心配なのがはやての関西弁。それと、違う二次小説読ませてもらいなのはが自分でなのはって言ってるけど、俺が間違ってるのだからうか…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3162x/>

モブキャラに恋しました。

2011年11月24日01時50分発行